



峠の茶屋 解体

2010年4月17-18日

大藪家は、2010年の連休明けに取り壊されることになった。

それに先立ち、敷地の一角に建てられていた「峠の茶屋」を解体・撤去する。

お披露目からちょうど一年の命だった。

姿かたちがこの場所から消えるとはいえ、材料は芸大に持ち帰って再利用を図る。

学内で同時期に進行していた「つちのいえ」に活かすのである。



解体作業の前に、解体の儀式「解体清祓(かいたいきよはらい)」を行う。儀式は、地元の建築士で大枝アートプロジェクト実行委員長の西小路敏さんに仕切っていただいた。



柱階段を槌で叩き、神に解体を知らせる「取毀(とりこぼち)の儀」を行う西小路敏さん

テラスから峠の風景を眺めるのもこの日が最後

「解体清祓」の儀式に臨む。
儀式には小清水漸顧問も参
列下さった。



作業は、「解体」というより「分
解」というべきもので、順次
丁寧に部材を取り外し、仕
分けしていく。



土は竹木舞からこそぎ取り、
土嚢につめる。竹や古材とと
もに芸大に持ち帰り、つちの
いえ制作に再利用することに
する。



『峠の茶屋』の作業を通して、制作と解体、創造と破壊の対立関係が、双方の循環的關係に転化することを理解した。これは通常的美術作品制作では見られない。ここでは解体は、同時に新しい素材の獲得でもあり、次の創造への入口なのだ。これは、形と素材の關係に關するこれまでの人間中心の考え方からの離脱を示唆する。人間にとっては、茶屋の形は消滅したのだが、素材にとっては、形から開放され、新たな可能態の地平に移されたのだ。壊れるのは形にすぎない。こうした質料 material の循環性を最も高いレベルで示すものこそ、「土」にほかならない。この認識は、次のプロセス、「壊される大藪家の壁と土塀の土すべてを救出し、再利用をはかること」へとわれわれを導く。

動く土・ゆらぐ風景

2010年前後の数年間、京都芸大の位置する大枝沓掛から大原野には、高速道路建設に伴う風景の大きな変容があった。

山は削られ、大地はえぐられ、家は壊され、墓すらも移動させられる。今日の風景は明日にはない。ここはどこなのか、わからなくなる。峠の茶屋とつちのいえの実践の下地にあるのは、巨大化した土木技術による風景の不安定化であり、大量の土の流動であった。

それと渡り合うには、素手でなければならなかった。用いる土も、建材や陶土のような「製品化されて売られている土」ではなく、環境を実質的に構成している「なまの土」でなければならなかった。



建設中の沓掛インターチェンジを俯瞰する。
左手に京都芸大、赤丸印がつちのいえ、青印が大藪家の位置。





京都芸大西側での沓掛インターチェンジ建設のための土木工事から（2010年2月24日）



上：工事現場から京都芸大の建物をおおぐ

右上：東海自然歩道沿いの墓地に迫る掘削ドリル



変容する風景への身体への介入。
のびてくる道を素手で止める。